



水沢 勉
MIZUSAWA Tsutomu
(神奈川県立近代美術館 館長)

福岡アートアワードの審査に参加したのとして感じたことを書いておきたいと思います。

まず、福岡市美術館という公立美術館が、現代美術の現在を、こうした購入というかたちの賞制度によってコレクションに反映させることが、いま多くの公立美術館が購入予算に関して深刻な困難に直面しているなかでとても貴重な試みであると思い、深く共感しました。自薦・他薦による応募者の総数は82名に及び、二次におよぶ審査を経て3名の受賞者を審査員による評点と議論を経て決定しました。

一次審査の際に、たんに数字だけの比較ではなく、審査員が評価する作家2名も加えたうえで二次審査に臨めたこともたいせつな経験でした。芸術の評価は、デジタルがむずかしく、共感に基礎を置くからです。コロナ禍で一次審査は、全員オンライン。二次審査ではわたしだけ個人的な事情でオンライン参加となりました。

審査結果は、市長賞は鎌田友介さん、優秀賞はチョン・ユギョンさんと石原海さんの2名となりました。



植松 由佳
UEMATSU Yuka
(国立国際美術館 学芸課長)

今年から福岡アートアワードが新しく開始された。このアワードのユニークな点として、福岡市内での活動が応募条件に含まれること、そして作品の買い上げをもって贈賞とし、これによりアーティストを支援するという点、さらにはその買い上げ作品は福岡市美術館のコレクションとして展示活用される点が挙げられる。

2回に及び選考を経て最終的に受賞者として選ばれた3名は各審査員からの評価も高く順当な結果だったと思う。それぞれの作家の過去、そして現在の活動状況も優れたものであり、第2回目となる選考委員会で示された買上候補作品についても、そのコンセプト、リサーチなどを含む制作過程、そして最終的に結実した作品の強度等、いずれも高い評価を得ていた。

市長賞の鎌田友介は、日本家屋をテーマにすることで現代史を浮かび上がらせる制作によりこれまで受賞歴を重ねており、注目の作家だと言えるだろう。その徹底したリ



堀川 理沙
HORIKAWA Risa
(ナショナル・ギャラリー・シンガポール ディレクター
キュレトリアル&コレクションズ)

福岡に住んだことはあっても、日本のアートシーンとは縁遠くなっている私にとって、福岡の地と過去一年間に活動が交差した作家たち八十二名の作品をみることは、懐かしい友人の新たな顔をみるような感覚を覚えた。新しいかたちのレジデンス、アートフェアなどの産業資本の導入により、作家の発表の場は確実に増えている。その多様化の現れのひとつでもある本アワードについて、選考過程を通して気づいた点について記しておきたい。一つは、公立美術館による作品の買い上げという贈賞形式である。周知のように、公立美術館の作品収集は、収集方針に沿って外部委員からなる収集審査会で決められる。当アワードでも、審査員の推薦を収集審査会が審議した上で最終的な作品購入の決定がされているが、例えば、収集方針を熟知した収集審査会委員がアワードの審議にも含まれることで、収集方針との乖離(の可能性)が回避できるのではないか。

次に、福岡で行われるアワードとして、当地の文脈との関わり方の深さの重要性についても悩んだ。受賞者三名は各人独自の活動を福岡・北九州を拠点に切り開いている。一方で落選者のなかには、長年福岡で重要な活動をしてきた作家も含まれ、本アワードが、福岡との関わりにおいて、

横浜生まれの鎌田さんは、空間全体を作品化するインスタレーションでその才能をすでに高く評価されています。と同時に建築やデザインにも研ぎすまされた感覚の持ち主です。さらにはインスタレーションを絵画化させることにも長けています。

神戸市生まれのユギョンさんは、日韓の文脈を踏まえて、安易に単純化することなく多義性を絵画に仕掛け、現在を問ひかけます。圧倒的な絵画としての存在感と繊細な意味の多層性が共存する表現を大胆に追求しています。

東京都生まれの石原さんは、映画監督であり、映像によるインスタレーションも手掛けています。東京と北九州を二拠点として制作に取り組み、土地に根差した文化を抑制の効いた映像で表現します。

三人の優れた才能は、福岡という土地の関係においても今後、新たな表現を生み出す可能性を大いに秘めています。まさに福岡アートアワードに相応しい才能であると思います。

サーチは、最終的に写真、映像そしてインスタレーションという手法を用いて作品に見事に昇華されている。観るものに強い印象を残す制作姿勢は、選考当初より評価を得ていた。

優秀賞を受賞したチョン・ユギョン、石原海も同様に、それぞれの明快なコンセプト、ユニークな視線、それぞれの作品が示す一貫した制作姿勢が特徴である。ユギョンは、自身のアイデンティティに向き合い、個人と国家の関係を問う制作を行なっている。石原は、映像表現をベースに幅広い活動を行なっているが、その映像はドキュメンタリー的な現実表現とファンタジー的な創作性が往還し、メッセージ性も兼ね備えている。いずれもがユニークな表現によって独自性を持ち、評価につながった。

受賞した3名はまだ比較的若い世代ではあるが、ある程度の実力を兼ね備えた作家たちが選ばれることで、今後のアワードの方向性を示すことになればと期待している。

どこに重点を置き、その独自性を打ち出していくかは今後問われていくだろう。

さて、受賞作品に焦点を移そう。鎌田は、帝国主義やナショナリズムに苛まれた二十世紀の歴史的遺産について、時に感情的になりやすいこの領域を、緻密に構成された視覚言語で紐解き、静かに、しかし強靱に「近代」の重層的な構造をあらわにさせる手腕が巧みであった。チョン・ユギョンは、在日コリアン三世としての自らのアイデンティをめぐらる問題をベースとしながら、その重さをポップでどこか可笑しみのある手法で軽やかに転換し、確信的に鑑賞者の視点や立ち位置に揺らぎを生み出す。一方、出品作品のなかで数少ない映像作品であった石原は、日本でタブーとも見なされがちな宗教的な空間に自らを置き、そこで出会った、世界のさまざまな重力に押しつぶされそうな市井の老若男女の、彼らが生きることをつなぎとめている信仰心、そしてお互いとの結びつきを、圧倒的な映像の表現力で肯定する。三人とも、未曾有のパンデミックと隔離された環境を我々が経て、内向きになりがちな思考を揺さぶり、自己への内省、他者との接続をうながす力のある作品で、今後のさらなる展開を期待させる。



第1回 福岡アートアワード受賞作品展

The 1st Fukuoka Art Award Exhibition

2023.3.29(水)-6.11(日)

会場：近現代美術室 B

実施概要

福岡アートアワードは、福岡市美術館が、Fukuoka Art Nextの一環として実施する事業として2022年度より新設されました。

過去1年間に福岡市内で目覚ましい活動をおこない、今後さらなる飛躍が期待できるアーティスト(美術作家)を対象に、贈賞によりアーティストを支援し、買い上げ作品は福岡市美術館の所蔵品として展示活用されるという、新たな視野をもつアワードです。本アワードの開催により、福岡市にアーティストが集まり、質の高い作品の展示そして市民がアートに親しむ機会が増え、福岡市がアートのまちとなることを目指しています。

福岡アートアワードでは、応募資格を過去1年間に福岡市内で公開・発表をともなう活動をおこなった作家とし、2022年9月15日～10月31日の応募期間に、82名の応募がありました。

2022年12月16日に開催した第1回選考委員会では、応募資料をもとに、神奈川県立近代美術館館長 水沢勉氏、国立国際美術館学芸課長 植松由佳氏、ナショナル・ギャラリー・シンガポール キュレトリアル&コレクションズ ディレクター 堀川理沙氏というグローバルに活躍するキュレーターで構成された選考委員による厳正なる審査により、12名が第2回選考委員会に通過しました。

本年1月19日に開催された第2回選考委員会では、作家から提供された追加資料とともに買い上げ可能作品についての審査がおこなわれ、最終的に3名の受賞が決まりました。

本アワードは、作品を購入し、福岡市美術館の所蔵品とするというこれまでにない形を取ります。3名の作品は、収集にふさわしい作品かを審議する収集審査会に諮られ、収蔵が承認されました。本展覧会では、福岡アートアワードの受賞作家3名の買い上げ作品を初披露いたします。



福岡市美術館
FUKUOKA ART MUSEUM

〒810-0051 福岡市中央区大濠公園1-6
TEL 092-714-6051

鎌田 友介
KAMATA Yusuke

《Japanese houses (Taiwan/Brazil/Korea/U.S./Japan)》

2021年

1984 神奈川県生まれ
2011 東京藝術大学美術学部先端芸術表現科卒業
2013 東京藝術大学美術研究科先端芸術表現修了
福岡県福岡市在住

受賞コメント

私は数年に渡り様々な国を訪れ、作品の重要なモチーフである日本家屋の調査を行ってきました。コロナ禍を受け福岡市に居住を移し、今までの調査を元に今回の受賞作品の制作を行いました。その作品が制作地の美術館に収蔵されることに大きな喜びを感じます。国境を往来することで見てくる日本の文化や歴史を、多くの方と共有できる機会を与えて頂いたことに感謝しつつ、今後より深く芸術の探求を続けていきたいと思ひます。

作品コメント

韓国や台湾には日本植民地時代に建設された日本家屋が、ブラジルには日本人移民が建設した日本家屋が多く残されています。アメリカでは対日戦争用焼夷弾の開発実験のための日本家屋が建設されました。これらの日本家屋は、日本の近代化の過程で様々な背景を含んで建設されてきました。この作品は、伝統的な日本家屋の床の間を模した構造の中にこれらの歴史が継ぎ接ぎに構成され、日本の伝統や文化に潜む政治的側面を炙り出します。



チョン・ユギョン
JONG YuGyong

《Let's all go to the celebration square of victory!》

2018年

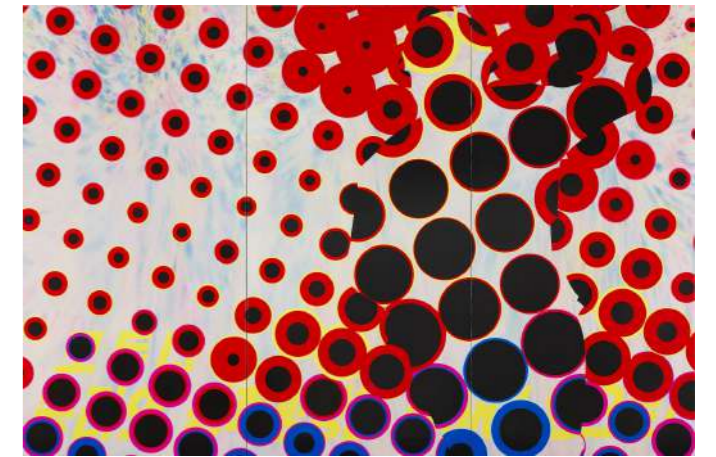
1991 兵庫県生まれ
2014 朝鮮大学校研究院予科卒業
福岡県福岡市在住

受賞コメント

日本で選挙権のない在日コリアンとして育った私にとって、アートは社会とコミュニケーションを取っていく数ある手段の一つです。私は作品を作り発表することで生まれる対話を信じていますが、まだまだ日本には声を出せない状況の人、出しているけど無視される人がたくさんいます。今回の受賞が多様性は認めるものではなく、そもそも社会は多様なのだということを手でいっていき、少しでも寄与できれば幸いです。

作品コメント

朝鮮学校で育った私の「対朝鮮」「対日本」という関係の中で揺れ動く実存を、個人と国家、抽象と具象、近くと遠く、重厚と軽薄など相反するものたちを重ねてみせることで、明瞭に複雑な今を生きる私のリアルを表現しようとしてきました。



石原 海
ISHIHARA Umi

《重力の光》 Gravity and Radiance

2022年

1993 東京都生まれ
2018 東京藝術大学美術学部先端芸術表現科卒業
2022 ロンドン大学ゴールドスミス校
Artist's Film休学中
福岡県北九州市在住

受賞コメント

北九州で制作した『重力の光』が、福岡の美術館に収蔵してもらえることになって嬉しい。これからもこの土地で作品を作り続けていきたい。

作品コメント

前を見ても後ろを見ても八方塞がり、人生どうすればいいんだろうとほぼパニックになっていた時に、友人の誘いでたまたま北九州を訪れて、東八幡キリスト教会と出会い、思いきって北九州に引っ越してこの街で過ごしているうちに『重力の光』が出来ました。自分にとって大切な作品を作るきっかけが、人生で一番沈んでいた時の出会いだったことで、また崩れ落ちてしまいそうになってもきっと大丈夫、と思えるひとつの指針になりました

